

## 根っこ建築

海野健三

時代の感性をアンテナで探る方法は、もう建築をつくる上であまり重要ではなくなっている。アンテナで探ったものは、時代の感性に即応し、時代の特徴を鏡のように映し出してくれる。しかし、建築には長い寿命が与えられている。それなのに、時代の変化は早い。もし刹那的な時代の感性を映し出したら、来年になったらもう古いものになってしまう。10年もしたら陳腐化する。

アンテナに対して、根っこで探る方法というのがある。土中に根をはりめぐらし、土中から水、養分、イオンなどを吸収する。収穫するのも手足を泥だらけにし、時間もかかる。電波でびよいと受け取るのに比して、時代の感性には即応しない。それは今日着る洋服の心配ではなく、人間の命や心に関わるものだから、即応しなくてよいものだ。そんな根っこ方法がこれからより重要になってくるだろう。

### 根っこ建築への道 その1 (自邸をつくるまで)

建築をつくるということは、私にとって図面を書くことではなく、私自身が実際につくることだった。だから図面はメモ程度のものにすぎない。しかし、現実には多くの手を借りなければならないから、裏方へまわることが多くなった。が、基本は同じだから、自分でも確かにつくれるというものしか設計しない。具体的にどうつくるのだから分からないが、かたちだけ決めるというのでは、とてもつくっている気がしない。

施工上の不明な点が多かった頃、大工の修業をしたこともあった。つくる上で常識というのがあるが、もし常識どおりつくりなかつたらどうなるのか、それが分からない期間が長かった。が、しかし、結局常識の中に魅力的なものはない。そうしないとコストが高くなるとか、無駄が多くなるとか、やったことないとか、保障できないなどといったものばかりで、どれも解決できるもの、探求すれば実践できるものだ。建築の可能性を探るためには、すべての常識が邪魔であった。よく予算のせいにする人がいるが、予算がなくても、私は多くのことをやってきた。

その思いはまず自邸をつくる時にぶつけた。まずは自分でつくることの実践である。基礎から全部やってみたかったが、そうはいかない事情が人並みにあった。しかし自分にとって重要な部分は、ほとんど自分でやった。友人の力は借りたが、つくり方の不明な点を説明すべく、手探り作業を1年間続けて、常識と意思の攻防をした。

天窗、ハイサイドライト、階段、ドア、その他多くの部位で、常識にとらわれずに自分の思いを実験した。

### 関係の美学

それらは建築をつくる技術、ディテールである。それだけで建築をつくれるわけではない。建築をつくる上で心に置いておくものは、関係の美ということだ。造形の美ではない。関係が美しければ造形も美しくなる。そして関係が広げれば広いほど、豊かで根をおろした造形となる。関係要因にはさまざまなものがある。材料、かたち、色、コスト、機能、家人、そして環境、思想、時代など、多ければ多いほどよい。それら総合的な関係を美しく融合させることが建築である。最も壮大な芸術である。私はその関係の中に、施工までも入れている。考えてみれば当然のこと

ある。施工まで取り入れないと実現できないというのが、私の場合かなりある。それらの関係のバランスのいいものがあるようだ。コストが安すぎることである。そのコストで実現できているから私にとってはいいのだが、他の建築家からは非難されている。安すぎる＝悪だ！ と。

他の要因とのバランスを欠いてまで造形を追求する建築は、したがって視野が狭く、脆弱で不安定なものに思える。特に最近目につくのが、造形といってもかなり表面的な皮膚的なものが多いことだ。皮膚建築といっているが、それも皮膚病にかかっているものが多い。公害のせいだろうか。

### 仲の悪い人間と建築

人間とは弱いものだ、という基盤でものを考えている。人間の尊厳とか、命の尊さとか、もう建築をつくる上で何の意味ももたなくなってしまうのだろうか。建築が近代合理主義とか伝統とかいう骨格を捨ててから、既にもう古くなってしまったが、ポストモダンとかで皮相的に浮かれ始めてから、変てこなカニやエビのような建築が出現し始めた。イカ、タコ建築、ナマコ建築など何でも出てきた。そのうちクラゲ建築や海藻建築なども出てくるに違いない。そうやってきたのは、人間が節度とか道徳とかという骨格を捨てて、自由と不安と強迫観念的な個性を得てうつろい始めてからのことだ。実在の証を得るためには、とうてい不要なものであふれかえった海を渡らねばならなくなった。それでも若い建築家たちは、果敢にも出航している。人間を強いものととらえているのだから。カニタコ建築の空間の中で、人間は存在をかけた戦いを強いられる。現代建築は人間に戦いを挑んでいるし、建売りは人間に媚びているが嘲笑しているし、雨露くらいはしのいであげれば後は知らんとも言いたげな乾いたカラカラ建築だったり、なぜこうも人間と建築の仲は悪いのだろうか。

命もファッションになり、幸福の概念も決められない時代にあっても、無から有形のものをつくり出す意志は、命への意欲であるはずである。だから建築は命と正面で対峙すべきものである。これは建築に限ることではない。

### 根っこ建築への道 その2(花火の見える家をつくるまで)

また、生きることの基本も見えなくなっている。私はよくヨットで海へ出るが、海上でもしヨットが故障しても簡単には助けに来てくれない。救助を求めるときは命に関わる時だけだ。自分でヨットを直し、自分で方向を求める原理が、海上にはある。陸上でも、そう生きていくほうが命を生きていく気がするし、借物でなく自分の命であることを実感できる。陸上の建築も海上でのヨットのようにありたい。建築は生活を浮かべるヨットであり、故障が生じても自分で直せる範囲のものがよい。仮にボタン一つで位置が出せるような機械を積むにしても、六分儀で位置を出せてのことだ。機械はこわれる。家人の命を尊重し、守りながらその命と同位置に建築もあるのがよい。

工業化や、高価な特注品や、ブラックボックスや、保険などで、建築の姿がよく分からなくなっている。そんな建築を人間の近くへ引き戻したいと思った。その実験が、「花火の見える家」であった。私のローテクオリジナルのもの

を沢山つけた家だ。ポストは塩ビ管を加工したもの、ドアの把手は普通の水道ホースでつくったものや、自然石をそのまま取り付けたもの、ドアのカギ、アルミ平板の庇、最上階のスライド式天窗、ファサードにある出窓風の開閉窓など、全部私が自分でつくった。いばつてもなく、媚びつてもなく、微笑んでいつも近くにいる建築が出来たのではないかと思っている。

### 根っこ建築への道 その3 (風の舞う家をつくるまで)

内装の仕上げ方には2方向ある。一つは昔ながらの土壁のようなもの。強くこするとボロッと落ちてきそうな仕上げ方法だ。その中で子供の躰をする。ものを大事にすることを教える。皮肉だが、現在出回っている新建材のほとんどはこのタイプである。ちょっとでも傷つけると価値の下がるもの。悪いことに工場出荷のときに100%のものだ。媚びて嘘つきの新建材を前にして躰しなければならないのは悲劇である。もう一つの方向は、生活の暴力をしっかりと受けとめる仕上げ方である。内装にとって生活とは暴力である。よりかかったり、引っかいたり、こすったりという行為を、しっかりと受けとめながら味わいの出てくるもので仕上げるやり方である。

私はほとんどの場合、後者のほうで仕上げている。といっても単価の高い家はめったにないから、材料選びが難しい。普通の場合、壁にはラージ合板、天井にはOSBを使うことが多い。私の期待に添えてくれる素材だ。そのほかに2×10'材のスプルズやMDFなどをよく使う。塗料も、自然に近いカシューを使う。「風の舞う家」はそんな感じで作った。

この敷地のまわりはまだ緑が豊富で、散歩するには快適な環境が残っていた。が、最近、車庫をつくるためのコンクリートの不気味な穴が、ちらほらと出てきている。せつかくの街並みがこわれてしまう。プライバシーを守るために塀はつくりたかったが、下手につくってはコンクリートの不気味な穴とたいして変わらなくなってしまふ。それでジャロジーを使った塀をつくった。開閉できるので風、光の調整ができるし、表情も大変優しいものが出来た。居間の両面に庭をもち、大きな開口があるので、それを開け、塀のジャロジーも開けると、風が気持ちよく通り抜ける。

### 根っこ建築への道 その4 (木立の中の家をつくるまで)

設計と施工はもともと一体のものという考えが私にはあった。毎回職人さんたちには大変世話になる。工事を一括で外注に出していたら、とてもこんなことはできないだろうと思うことがよくある。その実、一度外注に出そうと思って見積りを取ったことがあるが、100万円/坪くらいに出るわ、施工担当者に説明するのも大変で、うんざりしてやはり自分でやることになった。彫りながらかたちを探り出していく彫刻のように、建築をつくりながら確かめながらかたちを決めていくところがある。施工者によほどの理解者がいないかぎり、施工を外注に出すのはもともと無理な話だったのかもしれない。

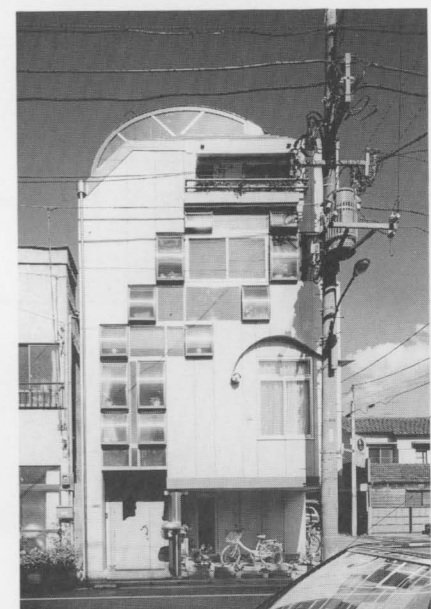
「木立の中の家」は60万円/坪以下でできる、と踏んだ。しかしフリーハンドが多い図面で、施工前はこんなことできるかな、という懸念が、単価・施工両面で強かった。施



自邸



風の舞う家



花火の見える家



同左



ビニールホースを利用した把手



パイプを利用した郵便受け石の把手など、すべて手づくり

写真撮影  
\* 橋 秀明  
\*\* 新建築写真部  
\*\*\* 小林浩志

工面では、今までの職人さんのグループで本当に大丈夫かな、という心配もあったが、今までそれでやってこれたのだと決心したとき、勇気が沸いてきた。そして身近にいる職人さんたちでこんな仕事もできるのだと分かったとき、とてもうれしかった。簾職と造園職が今回新しいメンバーだったが、よくやってくれた。簾屋さんは代々簾づくりを引き継ぎ、後継者もちゃんとして、簾を守る心が話をしていて伝わってくる。そういう人に会うと自分にも勇気が沸いてくる。造園屋さんも、もっている感性をおしみにくく発揮してくれた。

しかし逆もある。もうこんな手のかかる面倒なことはごめんだ、という人もいる。これは当然と思うべきものだろう。今まで長い付き合いだったが、これっきりとなった職人さんが出ると、施工の苦勞を感じ自分の設計に疑問をもつ。しかしやはり施工が身近にあることが、私の建築である。

いろいろな思いが交差しながらも、やっと木立の中の家が完成した。が、木立ちなど全くない。新しい家が出来、街もまだ真新しいが、何とも息苦しい街並みだ。隣の駐車場も近いうちにビルになる。本当はビルの中の家であるが、ビルは現世の仮の姿だ。土地のもつ気を探れば、本来は木立ちである。本来ある気を想起するために、中庭のまわりに24本の丸太を立てた。中庭は木立ちの中の日だまりの空間である。中庭と食堂は自由に入出入りするよう、食堂を土間的なものとした。子供が遊び、笑顔で暮らす状況を思い浮かべながら設計し、施工した。

(うんのけんぞう 建築家・海建築家工房)